

加齢黄斑変性症

目の構造はよくカメラに例えられますが、眼内に入った光が投影されるフィルムに相当するのが網膜で、そのなかでもよく使われる中央部を「黄斑」といいます。

最近、テレビや新聞で話題になる加齢黄斑変性症は、加齢に伴いこの黄斑部が変性してしまう病気です。症状としては、視野の中央で物がゆがんだり暗く見えるようになり、進行すると視力が高度に低下します。

原因として喫煙、肥満、紫外線その他、食事の欧米化（動物性脂肪分の過剰摂取）に伴い日本でも年々増加傾向にあります。

以前は有効な治療法がなかった病気ですが、近年は治療の選択肢が増えてきました。

まず、緑黄色野菜に多く含まれるルテインを食事やサプリメントで摂取することが発症の予防に有効とされています。

加齢黄斑変性症にはいくつかのタイプがありますが、新生血管が発生する「滲出（しんしゅつ）型」加齢黄斑変性症の場合、初期～中期であれば、抗血管新生薬の硝子体注射や、光線力学的療法、レーザー凝固術によって、進行の抑制や病状の回復に一定の治療効果が期待できるようになりました（タイプや病期によってその治療効果は異なります）。

また、ノーベル賞を受賞した山中教授による iPS 細胞からの発展で、網膜色素上皮細胞の再生医療の臨床研究が始まりました。

このように、予防から進行抑制まで治療法の選択肢が近年増えてきた加齢黄斑変性症ですが、末期まで進行してしまうと視力の回復は、現状においてもいまだ困難であり、再生治療が確立するには年月がかかる見込みです。

ゆがんで見える、中央が暗く見えるなどの症状があれば早めに眼科を受診して、病状が早期のうちに治療を開始することが大切と考えられます。

平成26年3月

法師山 至